

# 栽培漁業技術開発事業調査 ハマフエフキ（要約）

佐多忠夫、多和田真周\*、大城信弘

本調査の詳細は、昭和61年度栽培漁業技術開発事業調査報告書（沖水試資料No.96）において報告したので、ここでは概要を記す。

本調査では、ハマフエフキの人工種苗の放流技術を確立するために、種苗生産と中間育成、放流と追跡の研究調査を行っている。

1. 第1回次種苗生産（4～10月）は陸上大型水槽4面で実施し、その結果、99,950尾（平均全長13.3mm）を生産した。中間育成を海面小割網生簀と陸上大型水槽で75～96日間実施した結果、約12,000尾（平均尾叉長81.9～86.8mm）が生残し、その歩留りは6.7～14.9%であった。
2. 第2回次種苗生産（9～1月）は陸上大型水槽3面を使用して、初期飼料にS型ワムシを選別した小型ワムシを中心に飼育した結果、85～105日間後の取揚尾数は5,390尾（平均尾叉長39.8～51.5mm）、通算歩留りは0.1～0.3%の低率であった。
3. 0.5kℓカーボネイト水槽5面を利用してL型ワムシを選別した小型ワムシによるハマフエフキの初期飼育試験を実施した結果、日令14では3.2～21.7%、日令29では0.1～2.3%の飼育歩留りを示し、マガキ幼生が入手不可能な時期でも仔魚飼育が可能であることが示唆された。
4. 本年度は、名蔵湾に1,374尾（平均尾叉長約82mm）、川平湾に10,601尾（41～87mm）を放流した。
5. 名蔵湾放流魚は左腹鰭を抜去して標識とした。川平湾放流魚は、2,303尾については右腹鰭を抜去し、さらに、13mm白H型タグを背中に装着し、5,471尾については右腹鰭だけを抜去し標識とし、2,827尾については無標識とした。
6. 放流魚の捕食魚として、マダラエソ・オグロトラギス・ダングラトラギス・ダツ類が観察された。
7. 川平湾における再捕魚は、大部分がタグ装着魚であった。タグ装着魚の再捕率は2.2%であり、腹鰭抜去魚よりも高くなった。
8. 再捕魚の胃内容物は、多毛類・短尾類・異尾類・魚類などがみられた。
9. 放流後の経過日数が増すにつれて、再捕魚の摂餌率は高くなり、脂肪量指数は低くなる傾向がみられた。
10. 標識魚の飼育試験の結果から、川平湾における放流魚の腹鰭再生率は高いと考えられる。
11. 川平湾で5～12月に漁獲されたハマフエフキは、小型魚が多かった。沖縄県漁業協同組合連合会と八重山漁業協同組合の市場にて測定されたハマフエフキの尾叉長組成は、6～8月に大型魚が多いようである。
12. 尾叉長組成から推定したハマフエフキの成長は、5～9月に良く、10～12月に鈍るようである。
13. 県漁連市場のハマフエフキの取扱量は、八重山からの出荷量と関係が深いと思われる。

\* 現在：水産業改良普及所